

尿膜管癌（にょうまくがん）

尿膜管癌について

膀胱にできる悪性腫瘍では膀胱癌が知られていますが、尿膜管癌は膀胱癌の一種とされており、膀胱癌の1%未満の発生頻度です。尿膜管とは、胎児期に胎児の膀胱と臍（おへそ）をつなぐ管です。

尿膜管の役割については、以下のものがあります。

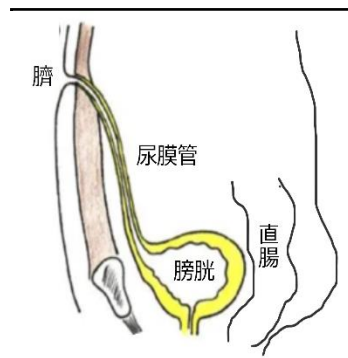
- 胎児期に胎児の尿を母体（胎盤）に流すための通り道
- 胎児期に膀胱と臍帯（へその緒）をつなぎ、必要な物質のやり取りを行う

通常は出生後に線維組織のみとなり閉鎖しますが、この尿膜管が癌に変化することで発生します。原因は不明です。

尿膜管癌の組織型（癌細胞の形）は腺癌がほとんどであり、胃癌や大腸癌などの消化器癌と組織型が似ているとされています。

尿膜管について

図1 正常解剖



臍から膀胱頂部まで繋がっているものが尿膜管ですが、出生後に索状物となり存在しています。機能的なものはありません。

尿膜管癌の症例

図2 尿膜管癌のCT所見



膀胱の外側に腫瘍が発生しています。膀胱へ浸潤もしており、血尿や膀胱炎のような下腹部痛などの症状を訴えることが多いです。

症状について

尿膜管癌は膀胱の外で腫瘍が大きくなるため、早期には症状が出ず、進行癌として発見されることが多いです。無症状のまま存在し、腫瘍が膀胱内まで顔を出してきた場合、症状として尿に血が混じったり（血尿）、下腹部痛や排尿時痛などが起こります。

尿膜管癌は周りへ浸潤をしながら大きくなると言われており、骨盤内臓器を腫瘍が巻き込むことも多いです。血液やリンパ流に乗って全身を巡るため、遠隔転移の好発部位として肺が最も多く、次いで脳・骨・肝となっています。

診断について

CT、MRIによる画像検査や膀胱鏡で発見されることが多いです。組織生検が確定診断には必要となります。（膀胱に腫瘍が顔を出してくることが多いため、経尿道的に組織生検を行うことが多いです）

尿膜管癌の病期について

Sheldon 分類

I 期：尿膜管粘膜を超えない

II 期：尿膜管粘膜を超える浸潤

III 期：隣接臓器への直接浸潤（III A：膀胱、B：腹壁、C：腹膜、D：膀胱以外の臓器）

IV 期：転移あり（IV A：リンパ節、B：遠隔転移）

ある程度進行するまで症状が出ないことも多く、発見時には進行期の III 期以上となっていることが多いです。

治療について

転移を認めていない場合、治療の第一選択は外科的切除であり、臍を含めた尿膜管＋膀胱部分切除、または進展範囲によっては尿膜管＋膀胱全摘術が推奨されています。

転移のある症例では、病気の進行を抑える目的で抗癌剤治療を行います。尿膜管癌は非常に稀な病気であるため、これまでに行われた研究が少なく、どの治療が最も効果的かわかっていません。尿膜管癌は組織学および臨床学的に大腸癌や胃癌に類似していることより、消化器癌で使用されている抗癌剤治療を行うことが多いです。

執筆者

- 氏名： 佐野 友康（さの ともやす）
- 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
- 診療科： 泌尿器科